

『ローマ兵からのあざけり』

'21/10/24

聖書箇所: マルコの福音書 15章 15-20節 (新約 p.100-)

今日と来週とで、いよいよ、私たちは、イエス様が十字架に磔にされるシーンを見ていこうとしています。…と言いましても、私からしても…、また、皆さんからしても、そこにあまり“新鮮味は無い”かも知れません。それは、まあ、もちろん、私たちが、イエス様の十字架にかかられたという話をもう何十回…、何百回も聞いているということもあるでしょうけれども…、それ以外にも、かなり前から、イエス様が「わたしはもう間もなく、十字架に磔にされて殺されなければならない！しかし、わたしは、その死から3日目によみがえる！」ということ、を、予め、何度も何度も予告して下さっていたからではないでしょうか？

命題: 当時のローマ兵たちの罪と、彼らが受けるべき報いとは？

まあ、いずれにしても、今日のみことばは、あのイエス様が十字架に磔にされる…、その直前の出来事について記してくれています。実は、今日はまず、皆さんに少しお詫びしないといけません。…と言いますのは、先週の礼拝で、「今日、私たちは、イエス様が十字架にかけられるシーンを見ていきます」という趣旨の話をしましたが、いろんな事情があって、それがもう1週延びてしまったからです。申し訳ありません。

さて、今日のみことばは、当時のローマ兵たちが、どのようにイエス様のことをあざけたのか？ということについて教えてくれています。そこのみことばを学んでいくことで、願わくは、このメッセージを聞いてくださった皆さんが、ますます、イエス様の十字架に感謝するようになり…、また、その反対に、私たち人間の愚かさや、罪深さについて、今一度、認識をしてくださればと、思います。

今日は、この後で会員総会がありますので(ついさっき、会員総会があったので)、いつもと比べて、かなり短くなりますが、ご一緒に、聖書のみことばを学んでいきたいと思います。どうぞ、聖書をお持ちでしたら、今日のみことばであるマルコ 15:15 以降をお開きくださいますでしょうか？

I・イエス様が経験された、むち打ちの刑！(15節)

どうぞ、まずは、今回のみことばの内、15節の部分だけをご覧ください…。このみことばから、私たちは、あのイエス様が、当時のローマ兵たちによって“むち打ち”という刑に処されたということが分かります。そこには、このように記されてあります。

15 それで、ピラトは群衆のきげんをとりとうと思ひ、バラバを釈放した。そして、イエスをむち打つて後、十字架につけるように引き渡した。

どうぞ、まずは、今読んだ15節に注目してください。ここ15節は、私たちが先週学んだ箇所と重なっております。先週私たちが学んだように、この当時、ローマからパレスチナ地域の総督を任されていたポンテオ・ピラトは、この当時、「事なかれ主義」のような感じになっておりました。…だから、彼は、イエス様のことをガリラヤ出身だと分かったら、そのイエス様のことをガリラヤ地区の国主(こくしゅ)であったヘロデ・アンティパスのところへと送ったのです。…しかし、そのヘロデ・アンティパスは、イエス様を見ても、そのイエス様が、自分が期待していたような奇蹟や癒しを行なってくださらなかったため、すぐにまた、総督ピラトの元へ送り返してしまいます…。

このピラトは、イエス様が無罪であったこと…、イエス様が十字架に当たるような罪を何一つ犯していないということ、また、当時の『祭司長たちが、ねたみからイエスを引き渡したことに、気づいていた』のです。だから、このピラトは、毎年、祭りの時に、人々の願う囚人をひとりだけ赦免するという“慣習”を利用して、できれば、このイエス様のことを釈放してやろうと試みたのですが、群衆たちの声がそれを許しませんでし

た。…実は当時、多くの群衆たちが、祭司長たちから扇動されていたこともあって、「イエスではなく、バラバを釈放しろ！…イエスを十字架に付けろ！」ということ、を叫び続けたのです。…そういったこともあって、ピラトは、とうとう、イエス様のことを十字架に磔にするよう命じます。それが、先週、私たちが学んだ15節のみことばでした。

さて、その15節ですが、どうぞ、皆さん、できたら、その後半、『イエスをむち打つて後…』という部分に注目してくださいませ？…実は、新約聖書では、「ムチを打つ」というような意味の単語が、4種類ほどあるのです。もちろん、それらは、微妙に、そのムチ打ちの内容や目的によって違ってきます。実は、ここで「ムチ打つ」と訳されてあるギリシア語の動詞(φραγελλοῦ)は、「フラゲロオー」というもので、このギリシア語は、「…「死刑が確定した奴隷や犯罪人に対して、処刑に先立って加えられた「ムチ打ち」を意味する」のだそうです。

ところで、皆さんは「鞭」と聞いて、どんな形のことをイメージされるでしょうか？…多分、ここ日本で「ムチ」と聞いた場合、多くの方たちは、男性が使っている丈夫なベルトを大きくしたような…、どちらかと言うと、今、前の画面に表示されてあるような「シンプルな形状のむち」をイメージされると思いますが、実は、そうではありません。…実は、先程紹介した「フラゲロオー」という動詞と関連して、「フラゲリオン」という名詞がありまして、それは、この当時のローマ人たちが用いた「ムチ打ちのための道具」を指しております。それは「数本の革ひもに金属片や動物の骨などを付けたような構造になっており、それらが肉に食い込み、ひどい苦痛を与えた…」のだそうです。

ちょうど今、前の画面に、それに近いイメージの写真を掲示していますけれども、恐らく、たった今説明した「数本の革ひもに金属片や動物の骨などがついたような構造になっており…」ということを考えますと、多分、このイメージよりも、もっと、とげとげしいような感じであったかも知れません。…皆さん、こんなムチを、イエス様は、あの十字架に磔にされる直前に受けられたのです！…そうして、その後、イエス様は、「十字架へ付けるように！」と言われて、ローマ兵たちに引き渡されるわけですね。

II・ローマ兵たちによる、あざけり！(16-20節)

じゃあ、今度は、今回のみことばの内、16-20節の部分を見ていきましょう…。このみことばは、あのイエス様が、当時のローマ兵たちによって“あざけられた”ということ、を教えてくださいませ。そこには、このように記されてあります。

- 16 兵士たちはイエスを、邸宅、すなわち総督官邸の中に連れて行き、全部隊を呼び集めた。
- 17 そしてイエスに紫の衣を着せ、いばらの冠を編んでかぶらせ、
- 18 それから、「ユダヤ人の王さま。ばんざい」と叫んであいさつをし始めた。
- 19 また、葦の棒でイエスの頭をたたいたり、つばきをかけたり、ひざまずいて拝んだりしていた。
- 20 彼らはイエスを嘲弄したあげく、その紫の衣を脱がせて、もとの着物をイエスに着せた。それから、イエスを十字架につけるために連れ出した。

さて、先程見た15節の後、イエス様は、ここ16節のみことばが教えてくれているように、ローマ総督であったピラトが住んでいた官邸へと連れていかれます。実は、この時、イエス様が連れて行かれたローマ総督の官邸は、今、前に表示してある、赤い丸印のところ…、「アントニアの要塞」の中にあつた¹と考えられています。ここは、ヘロデが建てた「神殿」に隣接する形で建てられておまして…、その神殿よりも、もう少し高い構造になっていたため、その神殿を上から見下ろして、ローマが神殿の全域を監視できるよ

¹ 新聖書辞典「総督官邸」から

うな構造と言うか…、仕組みになっていたわけです。

そこに、ローマ兵の「全部隊が呼び集められた」ということを、このみことばは教えてくれています。実は、ここで言われている『全部隊』という単語は、多分、皆さんもご存知の「レギオン」という単語の 1/10 を指す²ような「スペイラ」という単語が使われてあります。…ということで、この時、イエス様の周りには、何と、600 人ものローマ兵たちが付いていたわけです。…皆さん、600 人って、大体、イメージできますよね？…イエス様、たったひとりのために…、その周りには 600 人ものローマ兵たちが付いていた、と言うのです。

さて！ そんなイエス様を十字架につけるべく、600 人ものローマ兵たちは、イエス様のことを大勢であざけつたということを、このみことばは教えてくれています。ここ 17 節で、イエス様は、ローマ兵たちによって、「紫の衣を着せられた」ということが分かります。…実は、平行記事であるマタイ伝 27 章を見ても、**そこでは、『緋色の上着』**と記されています。ここで、まず皆さんに分かっていただきたいことは、紫や緋色と言いましても…、この当時は今から 2000 年も前の時代のことですから、どこまでキレイに…、鮮やかな「紫」や「緋色」という色に染められていたか確かめる術がありません。

「緋色」と言いますのは、インターネットで調べてみますと、今、前の画面に出ているような「赤の一種で、やや黄色味のある鮮やかな赤」という風に説明されておりました。…恐らくですが、この時、イエス様が着せられた衣は、ローマ兵が身につけていたマントか何かで、それが紫外線か何かで色褪せてしまって、角度によって、紫だったり…、緋色に見えたのではないのでしょうか？

実は、この当時、紫色というのは、王様や身分の高い者が身につけるような…、「高貴な色」として使われていたそうです。そのため、ローマ兵は、イエス様のことをあざげると言うか、バカにするような意図で、イエス様に、本物の高級な紫色の着物ではなく…、色褪せて…、みすばらしくなったような着物を着せたのです。

それだけではありません！ …このローマ兵たちは、イエス様の頭に、『**いばらの冠を編んでかぶらせ(た)**』とあります。皆さんも、ご存知のように、王様と言えば王冠です。…この後の 18 節のみことばが教えてくれているように、イエス様は「ユダヤ人の王様である！」というような、よく分からない罪名で、ローマから有罪と認定され、十字架刑に処されることが決まってしまう。…そういったこともあって、ローマ兵たちは、イエス様のことを、まるで、王様になり損ねた愚か者として、紫の衣を着せたり、イバラの冠をかぶらせたりしたのです。

ですから、ここ 18 節のみことばが教えてくれているような…、『**それから、「ユダヤ人の王さま。ばんざい」と叫んであいさつを始めた。**』とありますが、彼らローマ兵たちは、イエス様のことを“敬って”、万歳！と叫んだり、イエス様に挨拶をしたわけではありません。…彼らは皆、イエス様のことをあざけて…、つまり、バカにするために、わざわざ、紫の衣を着せたり、イバラの冠をかぶらせたり…、その他、様々なことをして、イエス様を愚弄したのです。

また、19 節以降には、**今度、そのイエス様のことを「葦の棒で叩いたり、つばきをかけたり…、あるいはまた、ひざまずいて拝んだりしていた」と**あります。もちろん、皆さんは分かっていますよね？ …ここで、ローマ兵たちがイエス様に対して、ひざまずいて、拝んだりしたというのは、イエス様のことを、神や救い主として認めたからでは、“決して”ありません！ ローマ兵たちは、そういった行為を皆、イエス様のことをあざげるために、そういったことをしたのです。

² 新聖書注解「新約1」の p.304 の他、J-ばいふる Greek のギリシャ語辞典から

ここで言われていた「葦の棒」というのも、当時の王様という存在が、権威の象徴として持っていた杖を、言わば、真似て、イエス様に、「葦」という真つすぐで、かつ、貧弱な棒を持たせたのです。…このように、当時のローマ兵たちは、散々、イエス様のことを嘲弄(ちょうろう)…、つまり、あざけた挙句、1度、イエス様に着せた紫の衣を脱がせたりして、最後、イエス様のことを十字架へつけるために、ローマ総督の官邸から連れ出していきました。…というのが、今日のみことばが教えてくれている内容です。

Ⅲ・イエス・キリストによる **裁き** !

さて、先程も言いましたように、今日は、会員総会ということもあって、もうそろそろ、メッセージを終わっていかないとはいけません。…**そこで、最後に、イエス・キリストによる“裁き”ということに関して、見ていきたい**と思います。

どうぞ、今度は、できましたら、使徒 4 章のみことばをご覧くださいませ？ …そこには、先週、少し引用したように、使徒ペテロやヨハネが、その当時の大祭司や指導者たちから“脅迫された”というシーンが描かれています。…皆さんも、よく分かっていますように、この時は、イエス様の十字架から、ほんの数ヵ月しか経っていません。…と言うことは、この時、ペテロとヨハネたちを脅迫したメンバーは、あのイエス様のことを、たくさんのルール違反を犯して強引に死刑へと追いやったメンバーと、恐らく、誰一人変わっていなかったでしょう…、恐るべき宗教的指導者の面々なのです。…そうでしょ！

しかし、そんな恐ろしい指導者たちを前にして、ペテロとヨハネは、使徒 4:19-20、『19 …神に聞き従うより、あなたがたに聞き従うほうが、神の前に正しいかどうか、判断してください。20 私たちは、自分の見たこと、また聞いたことを、話さないわけにはいきません。』と言いつつ、この後も、イエス様の十字架や復活という、福音のメッセージを大胆に宣伝していきたくてです。

でも、今、皆さんに注目していただきたいのは、そのすぐ後です。その**使徒 4:27-28** をご覧ください。『**27 事実、ヘロデとポンテオ・ピラトは、異邦人やイスラエルの民といっしょに、あなたが油をそそがれた、あなたの聖なるしもべイエスに逆らってこの都に集まり、28 あなたの御手とみこころによって、あらかじめ定められたことを行いました。…**』と続いています。

皆さん、気付いてくださいますか？ …このみことばは、まさに、先週と今日のみことばが教えてくれているような内容について、どう教えてくれていますか？ …何と、初代教会のクリスチャンたちは、ヘロデやピラトがイエス様を裁いて、十字架へ追いやったことを指して、それは、28 節、「それは、神様の御手とみこころによって、あらかじめ、定められたことであつた！」と確信しているわけです。…すべては、神様の御手の中にあつたことで…、あのヘロデも、また、ローマの総督であつたポンテオ・ピラトもまた、神様の偉大なる御手の中で、言わば、踊らされていただけだ！ という趣旨の発言をしています。…天の神様は、すべてのことを、御存知であつたのです！ そうでしょ！

つい先ほども言いましたように、このみことばは、当時のローマ兵たちが、イエス様に、「イバラの冠をかぶらせた」ということを教えてくれています。…でも、皆さん、覚えてくださっていますか？ …イバラというのは、どんな植物でした？ …聖書では、イバラの成り立ちについて、どんな風に説明してくれていますか？ …創世記 3:17-19 には、あのアダムやエバが、神様のみこころに逆らって罪を犯してしまったので、彼らに対して、こんな風に宣告されています。『**17 また、人に仰せられた。「あなたが、妻の声に聞き従い、食べてはならないとわたしが命じておいた木から食べたので、土地は、あなたのゆえにのろわれてしまった。あなたは、一生、苦しんで食を得なければならぬ。18 土地は、あなたのために、“いばら”とあざみを生えさせ、あなたは、野の草を食べなければならぬ。19 あなたは、顔に汗を流して糧を得、ついに、あなたは土に帰る。あなたはそこから取られたのだから。あなたはちりだから、ちりに帰らなければならぬ。」**』

⇒皆さん、聞いてくださいました？…このみことばによると、本来、神様が御造りになった世界に、イバラなんて存在していなかったのです！…しかし、アダムとエバが罪を犯してしまったために、この世界が罪によって、大きく呪われてしまいました…。言わば、『いばら』というのは、その象徴でもあるのです。恐らく、当時のローマ兵たちは、そういったことを知らなかったでしょうけれども、彼らは、その罪の…、あるいは、罪の罰の象徴とも言えるイバラをイエス様にかぶらせたわけで、それは、まるで、イエス様が、私たちの罪を背負って、私たちの身代わりとなって裁かれてくださるということを物語っているように思われます。

それと、次に、黙示録 2 章のみことばを紹介させてください。ここ黙示録には、天の神様が使徒ヨハネに啓示して下さった幻について記されています。その黙示録 2-3 章には、7つの教会のことが紹介されていますが、その4つ目の教会である、「テアテラの教会」に対して語られてある、みことばをご覧ください。黙示録 2:24-29、『24 しかし、テアテラにいる人たちの中で、この教えを受け入れておらず、彼らの言うサタンの深いところをまだ知らないあなたがたに言う。わたしはあなたがたに、ほかの重荷を負わせない。25 ただ、あなたがたの持っているものを、わたしが行くまで、しっかりと持っていなさい。26 勝利を得る者、また最後までわたしのわざを守る者には、諸国の民を支配する権威を与えよう。27 彼は、“鉄の杖をもって”土の器を打ち砕くようにして彼らを治める。わたし自身が父から支配の権威を受けているのと同じである。28 また、彼に明けの明星を与えよう。29 耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。』

⇒良いでしょうか？皆さん。ここ 27 節のみことばが教えてくれている『彼』というのは、イエス様のことを指しています。ここで言われているのは、恐らく、神様が約束をされた千年王国に関することです。その少し前に、イエス様は地上再臨をされて、ゼカリヤ書 14 章に預言されてあるように、オリブ山に降りてこられます。その時、イエス様を信じなかった者たちは皆、裁かれて、その千年王国に入ることはできません…。

その後、イエス様は、ユダヤ人たちに約束された王国をこの地上に築いてくださいます。しかも、大変驚くべきことは、今の教会の時代に救われた私たちは、王となって、その地上の王国を治めるということです。だから、I コリント 6 章では、イエス様によって救われた、私たち聖徒が、この世界を裁くようになる！ということを教えてくれています。I コリント 6:2-3、『2 あなたがたは、聖徒が世界をさばくようになることを知らないのですか。世界があなたがたによってさばかれるはずなのに、あなたがたは、ごく小さな事件さえもさばく力がないのですか。3 私たちは御使いをもさばくべき者だ、ということ、知らないのですか。それならこの世のことは、言うまでもないではありませんか。』とあるわけです。…と言いますのも、私たち教会の時代に救われたクリスチャンたちは皆、御霊なる神様のバプテスマによって、救い主であるイエス様と一体とされて、そのイエス様のからだを構成する一部分とされた…、あるいは、キリストの花嫁とされたという“特権”があるからです！…こういった恵みは、教会の時代に救われた、私たちクリスチャンにだけ与えられた特権で…、旧約時代の信仰者には、約束されてありません。

<励ましの言葉>

先程の黙示録 2 章の預言に戻りますけれども、そこで、イエス様は、27 節にあるように、『鉄の杖をもって土の器を打ち砕くようにして彼らを治める。…』とあります。イエス様こそは、ローマ兵が与えた葦の棒などではなく…、しっかりと『鉄の杖』を持って、やがて、来たるべき…、その千年王国において、王として君臨されるお方です！

そういったお方を、この当時のローマ兵たちや、当時の者たちは、散々愚弄したのです…。もちろん、それらは皆、すべては神様の最善なる御計画でありました。…しかし、だからと言って、彼らの犯した罪が軽減されるわけではありません。神様の御計画だからと言って、罪が赦されるなら、イエス様を裏

切った、あのイスカリオテだって無罪放免になったことでしょう。…しかし、聖書のみことばは、決して、そうは教えませんでしょ！

ヤコブ 1:13-14 のみことばが、『13 だれでも誘惑に会ったとき、神によって誘惑された、と言ってはいけません。神は悪に誘惑されることのない方であり、ご自分でだれを誘惑なさることもありません。14 人はそれぞれ自分の欲に引かれ、おびき寄せられて、誘惑されるのです。』と教えてくれているように、神様がイスカリオテやローマ兵たちのことを罪にいざなったわけではありません！…私たちは皆、善であろうと悪であろうと、それにふさわしい報いを、神様から受けるのです！

何度も言いますように、本来なら、私たちにふさわしかったのは、罪の報いである…、永遠の裁きだけでした…。しかし、イエス様は、私たちのことを、その罪の呪いと罪の裁きから救うために、このイエス様を救い主として遣わして下さって、救いの道を完成して下さったのです！

どうか、このイエス様への感謝を忘れることなく…、また、まだ、このイエス様のことを信じず、救いをご自分のものとしておられない方は、1日も早く、このイエス様のことを真の神&あなたの救い主として、信じ仕える者となっただきたいと思います。最後に、お祈りをもって、今日のメッセージを終わらせていただきます。